

平成28年度

ファカルティ・ディベロップメント
推進委員会活動報告書

平成29年3月

兵庫教育大学ファカルティ・ディベロップメント推進委員会

平成28年度ファカルティ・ディベロップメント推進委員会活動報告書

【目次】

I	平成28年度FD活動の概要	1
	1. 平成28年度の活動概要	2
	2. 平成28年度 中期計画・年度計画	4
	3. 平成28年度の主なFD活動一覧	5
II	1年間の活動実績	6
	1. 平成28年度年度計画の実施について	7
	2. 「ベストクラス」の選定、公表	21
	3. アクティブ・ラーニング研究会の実施	24
	4. 平成28年度「学生による授業評価」実施結果	35
	5. 平成28年度 他大学等のFD研究会等参加状況一覧	37
	6. 平成28年度 教職大学院授業改善・FD委員会 活動実績	38
III	資料	39
	1. 本学におけるFDの定義について	40
	2. 兵庫教育大学におけるFD推進活動への取り組み	41
	3. 国立大学法人兵庫教育大学ファカルティ・ディベロップメント推進委員会規程	42
	4. 授業公開の実施に関する申合せ	44
	5. 本学におけるFD推進委員会と教育研究組織との関連図	45
	6. ファカルティ・ディベロップメント推進委員会委員名簿(平成28年度)	46

I 平成28年度FD活動の概要

I. 平成28年度FD活動の概要

1. 平成28年度の活動概要

本年度は、平成28年4月28日に第1回のFD推進委員会が開催され、これを含めてFD推進委員会が5回、学生・教職員FD活動交流会が2回、アクティブ・ラーニング研究会が3回開催された。これら委員会、交流会、研究会は、1.学生による授業評価の実施、2.平成27年度の授業を対象としたベストクラスの選定、3.アクティブ・ラーニング研究会の実施、4.良い授業とは何かの分析、5.アクティブ・ラーニングの定義の整理ならび実施状況の調査、にかかわるものであった。以下、その内容について説明したい。

まず、第1に、学生による授業評価についてである。授業評価は、前期が平成28年7月1日～前期科目終了日において、後期が平成29年1月10日～後期科目終了日において実施された。前期の授業評価に関して言えば、対象科目数403、実施科目数391、未実施率2.97%で、これまでで最も未実施率が低かった。多くの教職員、学生の協力を得て、授業評価が定着してきたと言えよう。学部に関して言えば、昨年度に比べて安全への配慮以外の7つの項目において、0.7ポイント程度の上昇をみており、とりわけ、①目標が明確(3.59)、②目的にふさわしい内容(3.58)が、他の項目に比べて高いことから、シラバスに基づいた、授業目的、授業内容の精査がなされたものと推測する。大学院修士課程に関しては、昨年度と同様で、⑦知的刺激を受けた(3.69)、①目的が明確(3.66)、②目的にふさわしい内容(3.65)が相対的に高い項目となっている。

第2は、ベストクラスの選定にかかわるものである。第1回学生・教職員FD活動交流会(平成28年5月6日)、第2回学生・教職員FD活動交流会(平成28年9月15日)、第2回FD推進委員会(平成28年9月30日)のなかで協議され決定された。平成27年度のベストクラスの選定対象となった授業科目数は、学部91科目、修士課程97科目、専門職学位課程27科目である。学生・教職員FD活動交流会にてベストクラス候補と授業科目が絞られ、授業担当者ならびに受講生への聞き取り調査を踏まえ選定理由書が作成された。これに基づいて、平成28年9月30日の第2回FD推進委員会にて平成27年度の9つの授業をベストクラスとした。

第3は、アクティブ・ラーニング研究会についてである。本年度は3回のアクティブ・ラーニング研究会を開催している。最初の2回は、ベストクラスに選定された大関達也准教授の「教えと学びの哲学」(夜間・平成28年11月18日6限)と秋光恵子教授の「子ども理解と学級経営の心理学」(昼間・平成28年12月8日2限)の公開授業とそれに基づく授業研究会である。どちらの授業も、授業構成に工夫がなされており、事例を提示し教師としてこの事例をどう考えるかという事例に向きあう機会が保証されている点に特徴があった。3回目のアクティブ・ラーニング研究会は、平成29年2月13日に実施された。ここでは、「兵庫教育大学の授業をどう考えるか」と題し、学生の授業評価から見た良い授業とは何かについて自由記述の分析結果を報告し、これに続き、良い授業とは何か、アクティブ・ラーニングについてどのように考えるかについて、パネルディスカッションがなされた。

第4は、「良い授業」とは何かを整理する年度計画12にかかわるものである。ここでは、評価の高い授業の自由記述を分析することで、学生から見た「良い授業」に共通する要素を抽出した。それによると、学部、修士、専門職のどの段階でも授業のわかりやすさが重視されていた。わかりやすさを支える要素としては、授業の目的・目標が明確であること、授業構成がよく練られていること、説明が的確であること、

具体的な事例を用いて説明がなされること、提示される資料や教材が充実していること、既知の知識との関連づけがなされること、教員からのフィードバックがあること、体験型ワークやグループワークなどの受講生同士の相互交流があることが、あげられる。抽出したカテゴリーを精査し読み解いたところ、良い授業とは、ある種の感動を作り出す授業であるといえよう。感動は何によって生み出されるのかを吟味したところ、気づきや発見、説明の分かりやすさ、充実した資料、相互性、教員の熱意や受講生への配慮、楽しかった・面白かったという達成感と学習意欲の喚起であろう。学生は、教員のもつ「熱意」「姿勢」（「学生への配慮」「丁寧な指導）」「人柄」（「ユーモア」）にふれながら、授業のなかで、「知識」「技能」を獲得し、「発見や気づき」「省察の機会」を得え、「楽しかった」「面白かった」という感動を覚え、「意欲の喚起」や「意識の変化」を引き起こさせられることになるようだ。

第5は、アクティブ・ラーニングにかかわってである。年度計画 02,05 は、「アクティブ・ラーニングの定義について整理するとともに、授業の実態について調査を行い、その拡充策・計画を取りまとめる」とある。これに基づきワーキンググループを設置し、アクティブ・ラーニングについての先行研究をレビューし、アクティブ・ラーニングの定義について整理した。これをもとに、Web 調査の調査票を作成し、学内でのアクティブ・ラーニングの実施状況を把握した。全体としては、大方の教員はアクティブ・ラーニングについて意識しており、現状でも、かなりの程度で実施していることが明らかになった。拡充策としては、①アクティブ・ラーニング研究会、授業公開を含めて、どれか1回は参加することによって授業改善を意識化すること、そのために、1) ベストクラスに選ばれた授業についての授業公開の情報を提供すること、2) 授業について語り合える場としてのワークショップの開催を促進すること、3) PBL (Problem Based Learning) や反転学習についての研修会を開催すること、加えて、教職協働、学生参画という観点から、②学部生の学生・教職員 FD 交流会への参加を募ることを掲げ、次年度以降の FD 活動を行うこととした。

2. 平成28年度 中期計画・年度計画

平成28年度 of ファカルティ・ディベロップメント推進委員会に係る中期計画及び年度計画は次のとおりである。

中期計画12	教育活動に対する評価結果を教育の質の向上や改善に結びつけるため、ファカルティ・ディベロップメント推進委員会を中心とした組織的取組により、ベストクラスの選定、教員養成スタンダードのカリキュラムマップの改善等、全学的なファカルティ・ディベロップメント活動を推進する。
年度計画12	27年度から開始したベストクラスの選定において、評価の高い授業の分析を進め「良い授業」に共通する要素を整理する。

(実施組織：FD推進委員会)

中期計画02	学生の主体的な学修を組織的に推進するため、アクティブ・ラーニング等の授業形態や授業方法を拡充し、併せて、学生に能動的な学習指導法、及びそれを通して育成すべき資質・能力とは何かを修得させる。また、学修時間の確保、シラバスの充実及び学修成果の可視化に取り組む。
中期計画05	学生の主体的な学修を組織的に推進するため、アクティブ・ラーニング等の授業形態や授業方法を拡充し、併せて、学生に能動的な学習指導法、及びそれを通して育成すべき資質・能力とは何かを修得させる。また、教員養成スタンダード（大学院）に示された資質・能力の観点から授業内容・方法を見直し、シラバス改善、学修成果の可視化に取り組む。
年度計画02、05	アクティブ・ラーニングの定義について整理するとともに、授業の実態について調査を行い、その拡充策・計画を取りまとめる。

(実施組織：学部教務委員会(02)、大学院教務委員会(05) FD推進委員会(02, 05))

中期計画03	厳格な成績評価を行うため評価方法を見直すとともに、学生による授業評価の結果の分析を行い、授業改善の具体的指針を明確化する。また、卒業認定については、新人教員としての資質や能力を着実に育成する観点から、ディプロマ・ポリシーに従って、卒業判定基準に基づき厳密に行う。
中期計画06	厳格な成績評価を行うため評価方法を見直すとともに、学生による授業評価の結果と教員養成スタンダード（大学院）の観点から、授業改善の具体的指針を明確化する。また、修了認定については、教育に関連する質の高い人材を育成する観点から、ディプロマ・ポリシーに従って見直し、厳格化した修了判定基準に基づき厳密に行う。
年度計画 03、06	学生による授業評価の結果を分析するとともに、教育改善推進室と連携して、成績評価の客観性、厳格性を担保するための課題を整理し、授業改善の具体的指針案を作成する。

(実施組織：学部教務委員会(03)、大学院教務委員会(06) FD推進委員会(03, 06))

3. 平成28年度の主な活動一覧

日 付	事 項
平成28年 4月28日	ファカルティ・ディベロップメント推進委員会（第1回） 年度計画検討WG設置
平成28年 5月26日	第1回学生・教職員FD活動交流会（ベストクラス選定作業）
平成28年 5月28日	関西地区FD連絡協議会第9回総会出席、「FD活動報告会2016」にてポスター 発表
平成28年 9月15日	第2回学生・教職員FD活動交流会（ベストクラス候補科目を選定）
平成28年 9月30日	ファカルティ・ディベロップメント推進委員会（第2回）
平成28年 7月 1日 ～前期科目終了日	前期「学生による授業評価」実施
平成28年10月	平成27年度授業科目における「ベストクラス」を公表（大学Webサイト）
平成28年11月18日	第4回アクティブ・ラーニング研究会 「ベストクラスのうちの1科目を授業公開及び授業研究会」 （合同開催：第3回学生・教職員FD活動交流会）
平成28年11月24日	ファカルティ・ディベロップメント推進委員会（第3回）
平成28年12月 8日	第5回アクティブ・ラーニング研究会 「ベストクラスのうちの1科目を授業公開及び授業研究会」 （合同開催：第4回学生・教職員FD活動交流会）
平成29年 1月18日	ファカルティ・ディベロップメント推進委員会（第4回）
平成29年 1月10日 ～後期科目終了日	後期「学生による授業評価」実施
平成29年 2月13日	第6回アクティブ・ラーニング研究会 「兵庫教育大学の授業をどう考えるか」基調報告及びパネルディスカッション （合同開催：第5回学生・教職員FD活動交流会）
平成29年 3月29日	ファカルティ・ディベロップメント推進委員会（第5回）

Ⅱ 1年間の活動実績

Ⅱ. 1年間の活動実績

1. 平成28年度の年度計画の実施について

本年度、FD推進委員会が担当した年度計画は、次の2つである。

年度計画 12 27年度から開始したベストクラスの選定において、評価の高い授業の分析を進め「良い授業」に共通する要素を整理する。

年度計画 02、05 アクティブ・ラーニングの定義について整理するとともに、授業の実態について調査を行い、その拡充策・計画を取りまとめる。

この年度計画を実施するために、FD推進委員会の中に、年度計画検討WGを設置した。メンバーは、須田委員長、山中副委員長、宮元委員、伊藤委員、藤木教育支援課副課長の5名である。WGは、計7回開催された。

第1回 2016.5.26 年度計画実施にあたっての方針の決定

第2回 2016.7.14 第1回「良い授業」の自由記述の分析

第3回 2016.8.2 アクティブ・ラーニングの定義についての整理・検討

第4回 2016.9.6 第2回「良い授業」の自由記述の分析

第5回 2016.9.23 第3回「良い授業」の自由記述の分析

第6回 2016.12.26 アクティブ・ラーニング Web 調査票検討

第7回 2017.3.6 アクティブ・ラーニングの拡充策について

1-1 年度計画 12：学生による授業評価から見た良い授業とは

(1) 分析対象となる自由記述と分析方法について

(i) 分析対象

平成26年度、平成27年度の授業評価の中から、学生による授業評価が3.5以上の授業科目に記載された高評価自由記述を対象とした。表1に示すように、分析対象とした自由記述数は、1729件である。

表1 分析対象とした自由記述の内訳

年度	区分	授業科目数			高評価自由記述数		
		前期	後期	計	前期	後期	計
平成26年度	学部	32	34	66	92	101	193
	修士	59	50	109	254	126	380
	専門職	22	12	34	169	44	213
	小計	113	96	209	515	271	786
平成27年度	学部	50	41	91	228	155	383
	修士	57	40	97	284	139	423
	専門職	19	8	27	119	18	137
	小計	126	81	207	631	312	943
合計		239	177	416	1146	583	1729

(ii) 方法

1) 学部、修士課程、専門職学位課程の区分で分析

平成 26 年度前期後期自由記述（伊藤・宮元担当）、平成 27 年度前期後期自由記述（須田・山中担当）を、学部、修士課程、専門職学位課程の区分で読み込み、学部は 3 つの授業規模ごと（30 人以下、31～80 人、80 人以上）に、修士は 2 つの授業規模（30 人以下、31 人以上）に分けて自由記述内容を分析した。

2) 自由記述を 3 段階で整理

まず、【カテゴリー 1】として「授業」「学習者」「教員」の 3 つの要素を抽出した。その後、【カテゴリー 2】として「授業」の下位カテゴリーを「内容」「教授行為」「活動」「構成」「教材教具」とし、「学習者」の下位カテゴリーを「成果」、「教員」の下位カテゴリーを「特性」とした。【カテゴリー 3】については、自由記述内容を反映するワードを付与し微調整しながら良い授業の要素を確定した。

(2) 自由記述の分析結果

(i) 各区分ごとの抽出カテゴリー

表 2、表 3、表 4 はそれぞれ、学部、修士課程、専門職学位課程ごとに抽出された良い授業の構成要素をまとめたものである。

表 2 学部にもみる良い授業の構成要素

カテゴリー 1	カテゴリー 2	カテゴリー 3
授業	内容	わかりやすさ、有用性、多様性、多面性、具体性、体系性 内容の充実、深さ、考え方を学ぶ、思考の促進、知的刺激、 発見・気づき、省察性、主体性、専門性
	教授行為	授業秩序、学生との距離感、自由に、適度の緊張感 説明力、的確さ、話術、受講生への配慮、丁寧さ、確認復 習、フィードバック
	活動	体験型ワーク、グループワーク、ディスカッション、 受講者同士の交流、留学生との交流、意見交換、現職院生 の関与、実習、現場体験
	構成	目的・目標の明確さ、見通しの提示、体系性、授業展開、 受講者ニーズへの対応、現職教員の関与
	教材教具	充実した資料、教具
学習者	成果	知識の獲得、能力・技能の獲得、視野・視点の広がり、知的 刺激、楽しかった、面白かった、わかった、充実感・満足感、達 成感、有意義、意欲の喚起、意識の変化、感謝、驚き、要望

教員	特性	人柄(意見を聞く姿勢、個人的魅力、言動、口調、有能さ) 考え方(学生第一)
----	----	--

表3 修士課程にみる良い授業の構成要素

カテゴリー1	カテゴリー2	カテゴリー3
授業	内容	わかりやすさ、理論と実践の融合、有用性、実践性、多様性、多面性、具体性、専門性、内容の充実、思考の促進、知的刺激、視点の転換、主体性、省察性
	教授行為	フィードバック、双方向性、的確さ、意見や視点の開示、わかりやすさ、受講生への配慮、丁寧さ、リラックス
	活動	体験型ワーク、グループワーク、ディスカッション、参加型授業、学び合い、現場体験、経験、実習、実験、教員との相互性、密度の濃さ
	構成	目的・目標の明確さ、授業構成、工夫、一貫性、非単調 受講者ニーズへの対応
	教材教具	充実した資料、リアルな資料、事例の提示、現場の声
学習者	成果	知識の獲得、能力・技能の獲得、視野・視点の広がり 主体的学び、楽しかった、面白かった、満足感・充実感、有意義、素晴らしい、勉強になった、肯定、意欲の喚、起意識の変化、感謝、参加意識、要望
教員	特性	人柄、熱心さ、教師としての姿勢、尊敬、丁寧な指導、話し方、教員の連携

表4 専門職学位課程にみる良い授業の構成要素

カテゴリー1	カテゴリー2	カテゴリー3
授業	内容	理論と実践の融合、有用性、実践性、具体性、わかりやすさ、多様性、専門性、体系性、思考の促進、省察性、よかった、好奇心をみたす
	教授行為	フィードバック、ふり返り、相互性、双方向性、学生の意見の取り入れ、意見や視点の開示、的確さ、丁寧さ、リラックス、わかりやすさ

	活動	グループワーク、体験型ワーク、ディスカッション、経験密度の濃さ
	構成	目的・目標の明確さ、教員の分担と連携、受講者ニーズへの対応、一貫性、工夫、バランス、非単調
	教材教具	充実した資料、呈示の工夫、ていねいな準備、現場の声
学習者	成果	発見・気づき、視野・視点の広がり、楽しかった、面白かった、勉強になった、参加意識、満足度高い、省察の機会意欲の喚起、意識の変化、感謝
教員	特性	人柄、熱心さ、ユーモア、学生への配慮、丁寧さ、教師としての姿勢、学生第一、授業改善

(ii) 区分ごとの特徴

1) 学部

学部では、良い授業の評価基準として、わかりやすさ、有用性、相互交流、楽しさ、があるようである。以下、それにかかわる自由記述を示す。

・「内容はとても難しかったが、先生の説明はとても分かりやすく、ていねいに教えてくれました。」(H27 前期 30 人以下)

・「説明がとても分かりやすく、この授業が何をしたいのか、目的・目標がハッキリしていたので学ぶことに、とても集中できた。また、院生さんと関わることもできとても勉強になった。」(H27 後期 30 人以下)

・「人間関係を行っていく上で、重要視したいこと、注意して見るべきところがよく分かりました。とても楽しい実践もあった授業で実りのあるものとなりました。」(H27 後期 30 人以下)

2) 修士課程

修士課程では、良い授業の評価基準として、わかりやすさ、有用性、理論と実践の融合、相互性（グループワーク、体験型ワーク）、充実した資料、知識の獲得、知的刺激、楽しさ、があるようである。以下、それにかかわる自由記述を示す。

・「資料もわかりやすく、説明もとてもわかりやすくて、毎回の授業がとても楽しかったです。今まで全く知らない事だったので毎回、新しい知識を得ることができ、刺激になりました。ありがとうございました。」(H26 前期 31 人以上)

・「2人一組、4人一組での協同学習の場面が中心で、90分があつという間でした。ソーシャルボンドの大切さ、コミュニケーションの機会の作り方について、身を持って学ぶことができました。現場に持ち帰って、すぐに活用できる内容ばかりで、とても有意義な3日間でした。」(H26 前期 31 人以上)

・「大学教員（研究者＋教育者）であると素直に尊敬できる、素晴らしい講義でした。形成評価、グループワーク等、今言われている学習形態も様々取り入れられており、準備も完璧でした。一教員として、大変勉強になりました。」(H27 前期 31 人以上)

3) 専門職学位課程

専門職学位課程では、良い授業の評価基準として、理論と実践の融合、具体性、わかりやすさ、多様性、フィードバック、グループワーク、充実した資料、があるようである。以下、それにかかわる自由記述である。

- ・「これまで感覚的にこういうものであろうと思っていたことを、理論的に解説していただいた部分が多くあった。」（H26 前期専門科目）
- ・「学生の意見を取り入れた授業の問いを導き出し、その問いについて、時間をかけて論議することができた。」（H26 後期専門科目）
- ・「授業のリフレクションが次時の授業で冊子になって返され、質問事項については新たな資料が示されたり、先生自身の授業の自己評価が数値で示されたりと、授業改善の様々な工夫がされていた。」（H26 前期共通基礎科目）
- ・「教育に対する信念と情熱をもって授業に臨まれ、資料も適切である。」（H27 前期共通基礎科目）

(3) 考察と授業改善の指針

(i) わかりやすさの構造

受講生は、理解したい、わかりたいという思いを持ち授業に臨んでいる。したがって、まず、この思いを受けとめることが必要になるであろう。

わかることを支える要素としては、授業の目的・目標が明確であること、授業構成がよく練られていること、説明が的確であること、具体的な事例を用いて説明がなされること、提示される資料や教材が充実していること、既存の知識との関連づけがなされること、教員からのフィードバックがあること、体験型ワークやグループワークなどの受講生同士の相互交流があること、があげられよう。

一方で、わかりやすい、わかるということに、学生が安住することに対しての危惧もある。学ぶという行為は、わからないことをわかるようにするという行為である。わからないというある種欠乏状態に身を置くことによって、わかることへの可能性が開かれる。常に、わかりやすい授業に配慮した授業が展開されると、学生は知識は提供してくれるものだと思い込み、自らの手で知識を創り出すことに億劫になるというパラドックスが生じることにもなる。

(ii) 感動を作り出す授業

良い授業とは、ある種の感動を作り出す授業であるといえよう。感動は何によって生まれるのか。それは、授業それ自体の「体系性」「具体性」「多様性（多面性）」であったり、授業を通じてなされる「思考の促進」「気づきや発見」（理論と実践の融合を含む）「省察性」や、教員の「説明の的確さ」や「わかりやすさ」、説明に用いられる「充実した資料」、授業の中での「相互性（学びあい）」や「協同性」、そして、教員の「熱意」や「指導の丁寧さ」によって引き起こされると考えられる。その結果として、学生は、授業が「楽しかった」「面白かった」と回答しており、同時に、この感情が「意欲の喚起」や「意識の変化」を引き起こすことになる。

(iii) 授業統括者としての教員の役割

「教員」は、「授業」の「内容」「教授行為」「活動」「構成」「教材教具」のすべてに関与する。同時に学生は、教員のもつ「熱意」「姿勢」（「学生への配慮」「丁寧な指導」）「人柄」（「ユーモア」）にふれながら、授業のなかで、「知識」「技能」を獲得し、「発見や気づき」「省察の機会」を得え、「楽しかった」「面白かった」という感動を覚え、「意欲の喚起」や「意識の変化」を引き起こさせられることになる。

1-2 年度計画 02、05：アクティブ・ラーニングに関して

先行研究にあたり、アクティブ・ラーニングの（１）定義、（２）形態と様式、（３）学びの深さの議論、（４）学びのプロセス、について整理した。そのうえで、Web 調査を実施し本学におけるアクティブ・ラーニングの実施状況を調査した。同時に、（５）拡充策を示した。資料的価値を考慮し、依拠した文献名とその箇所を記すこととした。

（１）アクティブ・ラーニングの定義

1. 中教審高等教育分科会大学教育部会 2012年3月16日発表「審議のまとめ（案）」

予測困難な時代にあって生涯学び続け、主体的に考える力を持った人材は、受動的な学修経験では育成できない。求められる質の高い学士課程教育とは、教員と学生とが意思疎通を図りつつ、学生同士が切磋琢磨し、相互に刺激を与えながら知的に成長する課題解決型の能動的学修（アクティブ・ラーニング（※））によって、学生の思考力や表現力を引き出し、その知性を鍛える双方向の講義、演習、実験、実習や実技等の授業を中心とした教育である。その際、実際の教育の在り方は各大学の機能に応じて異なるとしても、このような質の高い授業のためには、授業のための事前の準備（資料の下調べや読書、思考、学生同士の議論など）、授業の受講（教員の直接指導、その中での教員と学生、学生同士の対話や意思疎通など）、事後の展開（授業内容の確認や理解の深化のための探究、さらなる討論や対話など）やインターンシップやサービス・ラーニング（※）等の体験活動など、事前の準備、授業の受講、事後の展開を通じた主体的な学びに要する総学修時間の確保が重要である。教員が行う授業は、このような事前の準備、授業の受講、事後の展開といった学修の過程全体を成り立たせる核であり、学生の興味を引き出し、事前の準備や事後の展開などが適切・有効に行われるように工夫することが求められる。

2. 中央教育審議会「新たな未来を築くための大学教育の質的転換に向けて～生涯学び続け、主体的に考える力を育成する大学へ～」『中央教育審議会答申』2012年8月28日

・「教員と学生が意思疎通を図りつつ、一緒になって切磋琢磨し、相互に刺激を与えながら知的に成長する場を創り、学生が主体的に問題を発見し解を見いだしていく能動的学修（アクティブ・ラーニング）への転換が必要である。すなわち個々の学生の認知的、倫理的、社会的能力を引き出し、それを鍛えるディスカッションやディベートといった双方向の講義、演習、実験、実習や実技等を中心とした授業への転換によって、学生の主体的な学修を促す質の高い学士課程教育を進めることが求められる。」（p.9）

・「学生に授業のための事前の準備（資料の下調べや読書、思考、学生同士のディスカッション、他の専門家等とのコミュニケーション等）、授業の受講（教員の直接指導、その中での教員と学生、学生同士の対話や意思疎通）や事後の展開（授業内容の確認や理解の深化のための探究等）を促す教育上の工夫、インターンシップやサービス・ラーニング、留学体験といった教室外学修プログラム等の提供が必要である。」（p.9-10）

・「学生には事前準備・授業受講・事後展開を通して主体的な学修に要する総学修時間の確保が不可欠である。一方、教育を担当する教員の側には、学生の主体的な学修の確立のために、教員と学生あるいは学生同士のコミュニケーションを取り入れた授業方法の工夫、十分な授業の準備、学生の学修へのきめの細かい支援などが求められる。」（p.10）

3. 同用語集

教員による一方的な講義形式の教育とは異なり、学修者の能動的な学修への参加を取り入れた教授・学習法の総称。学修者が能動的に学修することによって、認知的、倫理的、社会的能力、教養、知識、経験を含めた汎用能力の育成を図る。発見学習、問題解決学習、体験学習、調査学習等が含まれるが、教室内でのグループ・ディスカッション、ディベート、グループ・ワーク等も有効なアクティブ・ラーニングの方法である。

4. 教育課程企画特別部会における論点整理についての報告 2015年8月26日

【深い学び】習得・活用・探究という学習プロセスの中で、問題発見・解決を念頭に置いた深い学びの過程が実現できているかどうか。

【対話的な学び】他者との協働や外界との相互作用を通じて、自らの考えを広げ深める、対話的な学びの過程が実現できているかどうか。

【主体的な学び】子供たちが見通しを持って粘り強く取り組み、自らの学習活動を振り返って次につなげる、主体的な学びの過程が実現できているかどうか。

5. 松下佳代・京都大学高等教育研究開発推進センター編著『ディープ・アクティブラーニング』勁草書房、2015年、pp.1-3。

- a. 学生は、授業を聴く以上の関わりをしていること
 - b. 情報の伝達より学生のスキルの育成に重きが置かれていること
 - c. 学生は高次の思考（分析、総合、評価）に関わっていること
 - d. 学生は活動（例：読む、議論する、書く）に関与していること
 - e. 学生が自分自身の態度や価値観を探求することに重きを置いていること
 - f. 認知的プロセスの外化をとまなうこと（溝上による定義）
- ※ボンウェルとエイソン(1991)の定義に溝上の定義を加える。

6. 溝上慎一『アクティブラーニングと教授学習パラダイムの転換』東信堂、2014年。

「一方的な知識伝達型講義を聴くという（受動的）学習を乗り越える意味での、あらゆる能動的な学習のこと。能動的な学習には、書く・話す・発表するなどの活動への関与と、そこで生じる認知プロセスの外化を伴う。」
(溝上,2014,p.7)

7. 溝上慎一「アクティブ・ラーニング導入の実践的課題」『名古屋高等教育研究』第7号、2007年、pp.269-287。

「アクティブ・ラーニングを『学生の自らの思考を促す能動的な学習』とゆるやかに最広義で定義」

8. 土持ゲーリー法一「中教審答申主体的学びがどう授業改革につながるのか」『第4回教育ITソリューションEXPO配布資料』2013年。

- ・「『主体的学び』あるいは『能動的学び』は、英語の“active learning”のことである。」
- ・「BonwellとEisonは、読み書きの議論、発表や実施といった『能動的学習経験』と、フィードバックされた課題を精査することなどを通して、自身の学習過程を振り返る『省察的学習経験』の双方を含む学習活動を能動的学習と定義づけた。」
- ・「ラーニング・ポートフォリオやジャーナルによる『省察』が重要な能動的学習を促す。」
- ・「アクティブ・ラーニングを促進するには、Student Engagementが不可欠である。」

9. 遠藤貴広「教員養成スタンダードの理念とその背後にある能力観・評価観－DeSeCoのコンピテンス概念を手掛かりにして－」『福井大学高等教育推進センター年報』No.3、2013年、pp.3-18。

「DeSeCoのキー・コンピテンシーについては、「道具を相互作用的に用いる」「異質な人々からなる集団で互いに関わり合う」「自律的に行動する」いう3つのカテゴリーがよく知られているが、実はその中核には「省察性（reflectiveness, reflectivity）」と呼ばれるものが位置付いている。それは省察的に思考し行動することを個人に求めるもので、状況に対峙するために特定の公式や方法を規定通りに適用するだけでなく、変化に対応し、経験から学び、批判的なスタンスで思考し行動することが求められている。」(遠藤,2013p.15)

10. 沖裕貴「学生参画型FD（学生FD活動）」の概念整理について－「学生FDスタッフ」を正しく理解するために－『中部大学教育研究』第13号、2013年、pp.9-19。

「三浦（2010）は、国内外において明快な定義が存在しないアクティブ・ラーニングについて、学生や生徒の学習を活発にするための教授戦略が多岐に渡り、学習のスタイルに関する理論も多数あり、そして実践のスタイルも多種多様であるという状況を踏まえると、この用語の説明はこれらを包括する一般的・普遍的な表現をとらざるを得ないと述べ、実践者自身が個々に自らの授業の実態、あるいは実践したい授業のあり方に沿うようにアクティブ・ラーニングを定義するしかないと結論づけている。」(沖,2013,p.11)

三浦真琴「Active Learningの理論と実践に関する一考察－LAを活用した授業実践報告(1)」『関西大学高等教育研究』第1号、2010年、pp.25-35。

11. 小林昭文・鈴木達哉・鈴木映司・アクティブラーニング実践プロジェクト『現場ですぐに使える アクティブラーニング実践』産業能率大学出版部、2015年。

・「一方的な知識伝達講義を聴くという（受動的）学習を乗り越える意味での、あらゆる能動的な学習のこと。能動的な学習には、書く・話す・発表する等の活動への関与と、そこで生じる認知プロセスへの外化を伴う。」（溝上氏の定義に依拠）

12. 上條晴夫編著『ワークショップ型授業で国語が変わる〈小学校〉』図書文化社、2004年、9頁。上條晴夫編著『教科横断的な資質・能力を育てる アクティブ・ラーニング 小学校主体的・協働的に学ぶ授業プラン』図書文化社、2015年、p.8。

（アクティブ・ラーニングの指標実践としての）ワークショップ型授業では、「授業の中心に活動がある」ように設計する。その体験を、「学び」にむすびつけるために「ふり返り」をする。以上の「活動+ふり返り」が、できるかぎり自由な、気楽な感じの中で行われるように、教師は子どもと「水平的な関係」になるように配慮する。

13. 田中博之『アクティブ・ラーニング 実践の手引き』教育開発研究所、2016年。

「アクティブ・ラーニングとは、課題の発見・解決に向けた主体的・協働的・創造的な学びであり、習得・活用・探究という学習プロセスに沿って自らの考えを広げ深める対話を通して、多様な汎用的能力を育てる学習方法である。」（田中、2116,p.22）

14. 坂井英樹「アクティブ・ラーニング実現に向けた『小学校英語』と『外国語』」『総合技術教育』2016年、6月号

〔外国語ワーキングでは〕言語活動の充実の観点から、目的を設定し、理解し、どのように解決するかという発信までの方向性を見出し、実際に言語活動に従事し、行ったことを振り返ることの重要性が議論されてきました。このような目的に応じたコミュニケーションプロセスの中に、思考力・判断力・表現力を活用する場面が含まれており、それが外国語の4技能を使ったアクティブ・ラーニングでもあるという議論がされています。

自ら考えて目的を設定したり、自分の意見を伝えたり、批判的に見て自分の考えを再構成したりする時には、必ず主体性が必要になります。また、他者に伝えたり、他者の考えを聞いたり、理解したりすることを通して目的を果たそうとすることで協働性が確保されます。

15. 河合塾『「深い学び」につながるアクティブラーニングー全国大学の学会調査報告とカリキュラム設計の課題』東信堂、2013年。

*さしあたっての定義（広義） 講義をただ座って聴くだけの100%パッシブな学び以外は、さしあたってアクティブラーニングとする。その上で、各種の授業形態を考える。

*オリジナルの視点としての、「高次のアクティブラーニング」と「一般的アクティブラーニング」の分別ー科目の目的による違い(pp.10-13)

- ・高次のアクティブラーニング：専門的知識を活用し課題解決を旨とするもの。解が一つではない問題に取り組むPBLやモノづくりの授業など。
- ・一般的アクティブラーニング：知識の定着・確認を目的とするもの。実験、ドリル、小テスト等を行う授業。
- ・一般的アクティブラーニングはできるだけ多くの科目で取り入れられるべき。一方、高次のアクティブラーニングは、学生にも教員にも負担が大きいため、すべての科目で行われるべきではないが、カリキュラム設計上4年間連続して、各学年の中心的位置に絞って配置されるべきとしている。
- ・全国調査(2011年度の科目を対象、調査時期は2012年1月)

調査で対象とする「アクティブラーニング科目」の定義

調査におけるアクティブラーニング科目の目的別分類とその定義

(2) アクティブ・ラーニングの形態と様式

16. 山路弘起「アクティブ・ラーニングの重要性と課題」（平成27年度教育改革ICT戦略大会2015.9.2におけるパワーポイント発表資料）。山路弘起「アクティブ・ラーニングとは何か」『大学教育と情報』2014年度, No.1, pp.2-7。

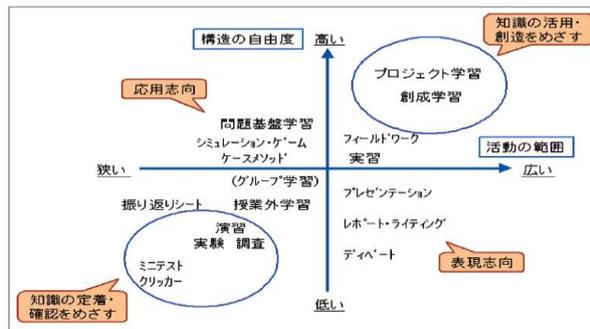


図1 アクティブ・ラーニングの多様な形態

6. 溝上慎一『アクティブラーニングと教授学習パラダイムの転換』東信堂、2014年、p.73。

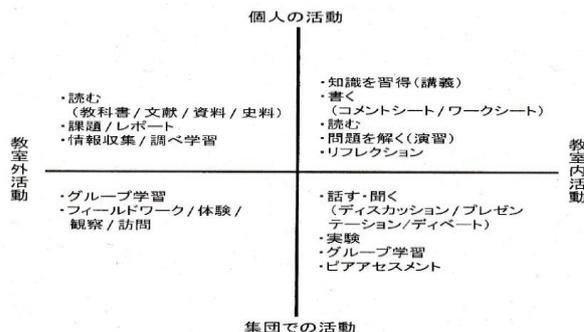


図3-1 アクティブラーニング型授業における学生の学習活動

17. 国立教育政策研究所『教員養成教育における教育改善の取組に関する調査研究～アクティブ・ラーニングに着目して～』2015年。

AL手法	大学	タイトル
PBL (Problem/Project-Based Learning)	三重大学	「教員養成課程におけるPBLの展開」 「PBL (Problem-based Learning, 問題基盤型学習, 問題に基づく学習)」
TBL (Team-based Learning)	高知大学	チーム学習を通して知識を獲得するチーム基盤型学習 (Team-based Learning : TBL)
ケースメソッド	千葉大学	「当事者意識で意思決定能力を磨くケースメソッド教育」
ディベート	聖心女子大学 立教大学	「根拠に基づいて主張する力と多角的思考を育むディベート型学習」
LTD (Learning Through Discussion)	久留米大学	「LTD 話し合い学習法：理想的な学習・対話法」
「体験」型プログラム	島根大学 愛媛大学 上越教育大学 福井大学	「地域での活動と省察を中心とした「体験」型プログラム」
教育インターンシップ	玉川大学	「学校現場等に「浸かる」インターンシップ」
サービス・ラーニング※	明治学院大学	「学生の成長と地域社会との互恵的な関係を目指すサービス・ラーニング」

※教員養成教育においての実践事例ではない。

(3) 学びの深さについての議論

18. 松下佳代「主体的な学びの原点－学習論の視座から－」『大学教育学会誌』第31巻第1号,2009,pp.14-18。

・「『主体的な学び』とは、学習プロセスを学生が自ら主体となって進めていく、そのような学習のことである」
 ・今日、わが国の大学教育で『主体的な学び』が議論される時には、大きく分けて2つのアプローチが存在するといえるだろう。一つは『能動的学習(active learning)』、もう一つは『学生参画型授業』である」
 ・「『能動的学習』は、学生が学習において能動的に活動することを重視した授業形態の総称として使われることが多い。具体的には、グループワーク、討論、発表、調査、製作、実習などの方法がとられる」
 ・「『学生参画型授業』」は、従来、もっぱら教員の側が行ってきた授業の設計・実施・評価に学生を参画させようとするものであり、そのポイントは、授業における教員と学生の“分業”の仕方を変えることにある」
 ・「以上の2つのアプローチは、授業場面でみれば重なるところが大きく、学生参画型授業でもほとんどの場合、能動的学習の形態がとられる。(中略)ただし、能動的学習は学生の参加の範囲が主として授業場面に限られるのに対し、学生参画型授業では設計や評価、学びの場づくりなどにまで広げられるという違いがある」
 ・「主体的な学びは深い学びを保障するだろうか。この問題を考える際には、まず、学びの外的側面と内的側面を区別する必要がある。外的側面とは観察可能な行動として表れる側面であり、内的側面とは精神的な活動として営まれる側のことである。深い学びとは、この内的側面における深みに焦点をあてている」
 ・「能動的学習での能動性は、本来は、〈内的側面における能動性〉を意味していたはずだが、今日では、ほとんど〈外的側面における能動性〉を意味するものとなっている。もっと正確に言えば、〈外的側面における能動性〉が高まるにつれて〈内的側面における能動性〉も高まるはずだという暗黙の前提がそこにはある」
 ・「〈内的側面における能動性〉と〈外的側面における能動性〉の関係は、(中略)図2のように二次元的に描けるだろう。図2では、『能動的に聴く』はB、『活動主義』はCに位置づく」

図2 学習の能動性



- ・「講義は依然として大学教育における重要な教育方法である。特に多くの体系化された知識を要求される学問分野では、講義を能動的学習の授業形態に置き換えることなど無理なことである。そこでは、内的側面における能動性を引き出すような講義のあり方を追求することが必要になってくる」
- ・「重要なことは、学びの外的側面と内的側面を区別し、主体的な学びにおいても、外的側面における能動性や学生の参加だけでなく、その内的側面にも目を向けることである。」

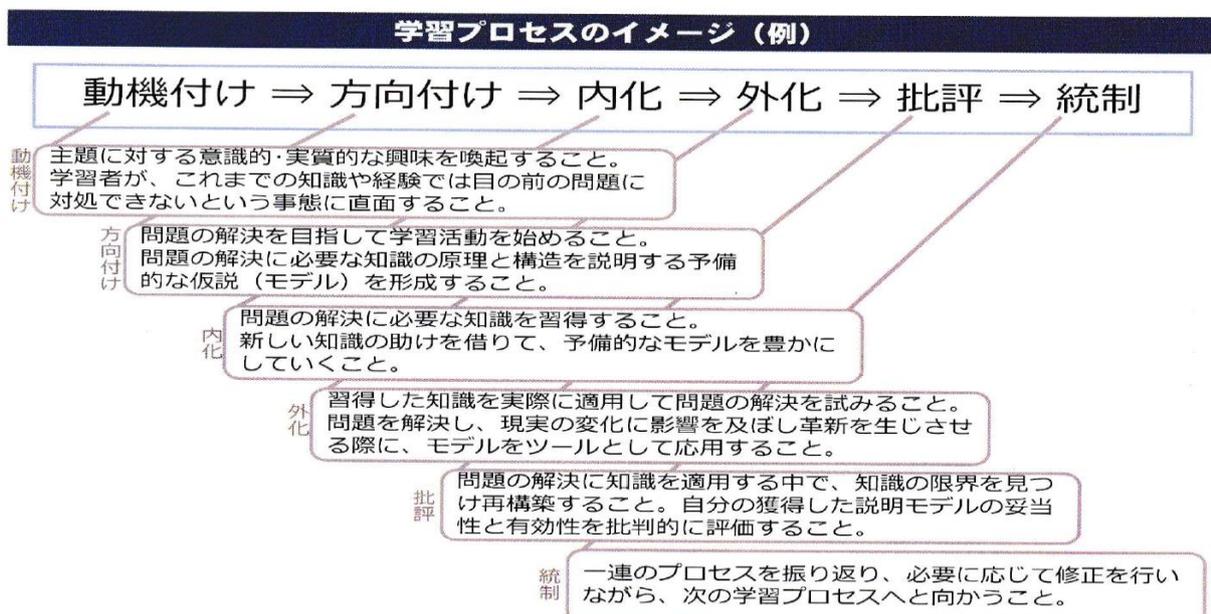
5. 溝上慎一「第1章アクティブラーニング論から見たディープ・アクティブラーニング」
 松下佳代・京都大学高等教育研究開発推進センター編著『ディープ・アクティブラーニング』勁草書房、2105年、pp.31-51。

学習への深いアプローチと浅いアプローチの特徴		活動の「動詞」から見る学習への深いアプローチと浅いアプローチの特徴	
	深いアプローチ	浅いアプローチ	
深いアプローチ <ul style="list-style-type: none"> ●これまで持っていた知識や経験に考えを関連づけること ●パターンや重要な原理を探すこと ●根拠を持ち、それを結論に関連づけること ●論理や議論を注意深く、批判的に検討すること ●学びながら成長していることを自覚的に理解すること ●コース内容に積極的に関心を持つこと 	<ul style="list-style-type: none"> ●振り返る ●離れた問題に適用する ●仮説を立てる ●原理と関連づける ●身近な問題に適用する ●説明する ●論じる ●関連づける ●中心となる考えを理解する ●記述する ●言い換える ●文章を理解する ●認める・名前をあげる ●記憶する 	<ul style="list-style-type: none"> ●コースを知識と関連づけないこと ●事実を棒暗記し、手続きをただ実行すること ●新しい考えが示されるときに意味を理解するのに困難を覚えること ●コースか課題のいずれにも価値や意味をほとんど求めないこと ●目的や戦略を反映させずに勉強すること ●過度のプレッシャーを感じ、学習について心配すること 	

Entwistle,McCune,&Walker(2010),table5.2(p.109)の一部を翻訳
 Biggs&Tang(2011),Figure2.1(p.29)の一部を翻訳・作成
 『ディープ・アクティブラーニング 大学授業を深化させるために』第1章(溝上慎一(京都大学高等教育研究開発推進センター教授)執筆)より 195

(4) 学びのプロセス

19. ユーリア エングストローム 著、松下佳代・三輪建二訳『変革を生む研修のデザイン 仕事を教える人への活動理論』鳳書房、2010年。



(5) 拡充策

拡充策として、第1に、アクティブ・ラーニング研究会、授業公開を含めて、どれか1回は参加することによって授業改善を意識化することとした。そのために、1)ベストクラスに選ばれた授業についての授業公開の情報を提供すること、2)授業について語り合える場としてのワークショップの開催を促進すること、3)PBL (Problem-based Learning) や反転授業についての研修会を開催することが、次年度以降のFD推進委員会の課題となる。第2に、教職協働、学生参画という観点から、学部生の学生・教職員FD活動交流会への参加を募り、学部学生からの声を取り入れ、アクティブ・ラーニングを実施できる人材育成にも力を注ぐこととした。

【文献一覧】

1. 中教審高等教育分科会大学教育部会 2012年3月16日発表「審議のまとめ(案)」
2. 中央教育審議会「新たな未来を築くための大学教育の質的転換に向けて～生涯学び続け、主体的に考える力を育成する大学へ～」『中央教育審議会答申』2012年8月28日
3. 同用語集
4. 教育課程企画特別部会における論点整理についての報告 2015年8月26日
5. 松下佳代・京都大学高等教育研究開発推進センター編著『ディープ・アクティブラーニング』勁草書房、2105年。
6. 溝上慎一『アクティブラーニングと教授学習パラダイムの転換』東信堂、2014年。
7. 溝上慎一「アクティブ・ラーニング導入の実践的課題」『名古屋高等教育研究』第7号、2007年、269-287頁。
8. 土持ゲーリー法一「中教審答申 主体的学びがどう授業改革につながるのか」『第4回教育ITソリューションEXPO配布資料』2013年。
9. 遠藤貴広「教員養成スタンダードの理念とその背後にある能力観・評価観－DeSeCoのコンピテンス概念を手掛かりにして－」『福井大学高等教育推進センター年報』No.3、2013年、3-18頁。
10. 沖裕貴「学生参画型FD(学生FD活動)」の概念整理について－「学生FDスタッフ」を正しく理解するために－『中部大学教育研究』第13号、2013年、9-19頁。
11. 小林昭文・鈴木達哉・鈴木映司・アクティブラーニング実践プロジェクト『現場ですぐに使える アクティブラーニング実践』産業能率大学出版部、2015年。
12. 上條晴夫編著『ワークショップ型授業で国語が変わる<小学校>』図書文化社、2004年、9頁。上條晴夫編著『教科横断的な資質・能力を育てるアクティブ・ラーニング 小学校 主体的・協働的に学ぶ授業プラン』図書文化社、2015年、8頁。
13. 田中博之『アクティブ・ラーニング 実践の手引き』教育開発研究所、2016年。
14. 坂井英樹「アクティブ・ラーニング実現に向けた『小学校英語』と『外国語』」『総合技術教育』2016年、6月号。
15. 河合塾『「深い学び」につながるアクティブラーニングー全国大学の学会調査報告とカリキュラム設計の課題』東信堂、2013年。

16. 山路弘起「アクティブ・ラーニングの重要性と課題」（平成 27 年度教育改革 ICT 戦略大会 2015.9.2 におけるパワーポイント発表資料）。山路弘起「アクティブ・ラーニングとは何か」『大学教育と情報』2014 年度, No.1, 2-7 頁。
17. 国立教育政策研究所『教員養成教育における教育改善の取組に関する調査研究～アクティブ・ラーニングに着目して～』2015 年。
18. 松下佳代「主体的な学びの原点－学習論の視座から－」『大学教育学会誌』第 31 巻第 1 号, 2009, pp.14-18.
19. ユーリア・エンゲストローム著、松下佳代・三輪建二訳『変革を生む研修のデザイン－仕事を教える人への活動理論』鳳書房、2010 年。

2. 「ベストクラス」の選定、公表

昨年度から選考を開始した「ベストクラス」について、平成27年度の「ベストクラス」として9つの授業科目を選定した。

あらためて、「ベストクラス」という概念について説明しておきたい。「ベストティーチャー賞」なら、すでにいくつもの大学が制度として導入しているが、本学は、「ベストティーチャー」でも「賞」でもない、「ベストクラス」である。なぜ「ベストティーチャー」でないのか、そして、なぜ「賞」でないのか。ここに、「ベストクラス」という概念に込められたユニークな企図がある。

なぜ「ベストティーチャー」でないのか。授業は教員の努力だけでよいものにはならない。教員のみならず、学生の高い参加意識があってはじめてよくなる。そうだとしたら、授業を担当する教員にのみ焦点があてられる「ベストティーチャー」という表現はふさわしくない。なぜ「賞」でないのか。「ベストクラス」は、優れた授業のモデルや規準を定め、それにあてはまるものを選ぶのではない。授業にはそれぞれ異なった意図やねらいがあるはずであり、それを一つの規準で評価することは授業の画一化を招きかねない。優れた授業とはどのようなものかという問いを失った瞬間に、優れた授業の多様性が失われる危険性がある。このように考えたとき、「賞」はなじまない。

「ベストクラス」の選定には、学生と教職員がFDについて公式に協議する「学生・教職員FD活動交流会」が大きな役割を果たしている。選定の流れは、次の通りである。まず、前年度の授業評価結果の自由記述を検討して候補となる授業科目を選ぶ。つぎに、「学生・教職員FD活動交流会」のメンバーが、授業担当教員と受講者の双方にインタビューを行い、選定理由書を作成する。そして、それをFD推進委員会で議論して最終的に選定するのである。この過程では、学生と教職員が協働して作業にあたる。よい授業とはなにか、率直な意見交換が行われ、学生にとっても教職員にとっても、授業について思考する刺激的で貴重な機会となっている。

「ベストクラス」の目的は、本学の教育の質の向上のため、よい授業を教職員と学生が共有することにある。選ばれた授業科目のそれぞれにある「持ち味」を共有していただければ幸いである。

ベストクラス候補科目の選出作業の様子



ベストクラス選定結果一覧（平成27年度開講科目）

H28.9.30 F D推進委員会

課程	授業科目名	履修年次	科目区分	受講者数 (人)	教室	開講時期
学部	教育課程論	2	教職キャリア科目群 教職支援科目	180	共通講義棟 106	前期 月3
	教育方法学	3	専修専門科目群 専門教育科目（学校教育）	7	教育・言語・社会棟 626	後期 金2
	解析学Ⅰ	2	専修専門科目群 専門教育科目（自然系）	30	共通講義棟 214	前期 集中
（大学院 修士）	教えと学びの哲学（昼間クラス）	1	専門科目 人間発達教育専攻／専門分野（教育コミュニケーションコース）	14	共通講義棟 212	後期 木2
	心理統計研究法演習（昼間クラス）	1	専門科目 人間発達教育専攻／専門分野（学校心理・発達健康教育コース）	11	教育・言語・社会棟 112	前期 水2
	生徒指導と学校教育相談（昼間・夜間クラス）	1	専門科目 人間発達教育専攻／専門分野（学校心理・発達健康教育コース）	75	神戸HLC 講義室4・5	前期 集中
	学級における人間関係の心理学（昼間クラス）	1	専門科目 人間発達教育専攻／専門分野（学校心理・発達健康教育コース）	60	共通講義棟 204	後期 木2
（専大学院 職）	特色あるカリキュラムづくりの理論と実際A	1	共通基礎科目	32	共通講義棟 304	前期 月2
	児童生徒を活かす学級経営の実践演習A	1	共通基礎科目	32	共通講義棟 302	前期 金2

ベストクラスの選定について

1. ベストクラス選定の目的

ベストクラスは、本学の教育の質の向上のために、よい授業を教職員と学生が共有することを目的に選定されるものである。

2. 選定手続き

①選定は、前年度授業評価結果を参考にし、学生・教職員FD活動交流会での検討に基づいて、FD推進委員会において行われる。

②授業評価の高評価授業科目を対象とし、原則として評価項目の平均値が3.5以上のものとする。ただし、選考基準平均値は、評価結果を考慮して設定できるものとする。

③高評価自由記述を検討して、よい授業を10程度に絞り込む。その際、授業規模、授業形態、履修年次、科目区分を考慮に入れる。

- ・学校教育学部 81人以上, 80~31人, 30人以下
- 修士課程 31人以上, 30人以下
- 専門職学位課程 共通基礎科目, 専門科目
- ・講義, 演習, 実験など

④候補とされた授業の担当教員と受講者(授業担当教員の推薦による)に学生・教職員FD活動交流会がインタビューを行い、検討資料とする。

- ・授業者に対しては、授業の意図、当該授業での授業意図の共有度、学生の参画度、当該授業の良さと課題など
- ・受講者に対しては、うけとった授業の意図、参画度、知的刺激、知識の創造など

3. 選定された授業科目の公表方法等

①ベストクラスとして冊子、本学Webサイトで紹介する。

内容は

- ・授業名(履修年次, 科目区分), 開講時期(時限), 教室環境, 受講者数など
- ・選定理由
- ・授業者の意図と授業の振り返り, 授業での工夫点, 今後に向けた改善点
- ・受講者の参画度インタビュー, この授業のオススメポイント

②アクティブ・ラーニング研究会での公開授業の候補とする。

以上

3. アクティブ・ラーニング研究会の実施

■第4回、第5回アクティブ・ラーニング研究会

11月18日（金）、神戸ハーバーランドキャンパス兵教ホールにおいて、FD推進委員会主催による第4回兵庫教育大学アクティブ・ラーニング研究会を開催し、約30人が参加しました。

また、12月8日（木）、加東キャンパス教育子午線ホールにおいて、第5回兵庫教育大学アクティブ・ラーニング研究会を開催し、約80人が参加しました。

このたびの研究会は、本学学生・教職員を対象として、平成27年度ベストクラスに選定された授業を公開することによって、授業改善のアイデアや手法等の情報を共有し、本学における教員相互の「授業研究」の場として、個々の教員、及び、大学全体の授業改善を推進することを目的に、公開授業と授業研究会の2部制で実施しました。

公開授業ではそれぞれ、平成27年度のベストクラス（9科目）から大学院の授業「教えと学びの哲学（夜間クラス）」、「子ども理解と学級経営の心理学」が公開されました。講義形式の授業の中で、受講生一人ひとりが活発に思考できる仕掛けが用意され、深い学びへと繋がっており、まさに「アクティブ・ラーニング」が展開されました。

公開授業終了後、引き続き実施した授業研究会では、授業者の意図や手法、受講生の生の意見を共有することができ、活発な意見交換が行われました。

参加者からは「授業の良さを考えることは、自分が今後授業をすることにも役立つと思いました」、「様々な人の意見を聞くことができ、より自分自身の認識が深まりました」、「授業構成が大変役立ちました」、「参加、交流がたのしく、主体性をもてたことを現場に生かせると思いました」などの声が寄せられ、今後の本学におけるFD活動を推進するうえで、有意義な研究会となりました。

■第6回アクティブ・ラーニング研究会

2月13日（月）、加東キャンパス総合研究棟において、第6回アクティブ・ラーニング研究会を開催し、約40人が参加しました。

このたびの研究会は、本学学生・教職員を対象として、大学の授業について、「良い授業とは何か」を本学の構成員全体で考える機会とし、本学の教育の質向上に資することを目的に基調報告とパネルディスカッションを実施しました。

当日は、名須川知子理事・副学長の挨拶の後、須田康之FD推進委員会委員長から『学生による授業評価から見た良い授業とは～自由記述の分析から』について、基調報告が行われました。

基調報告の後、行われたパネルディスカッションでは、須田康之FD推進委員会委員長がコーディネーターを務め、吉水裕也教授（教育実践高度化専攻長）が教員の立場から、北谷隆太郎さん（修士課程1年）が学生の立場から、山中一英FD推進委員会副委員長がアクティブ・ラーニングの視点から、3人のパネリストに話題提供をしていただき、わかりやすさの構造、良質な問いとはなど参加者とともに、良い授業についてより深く考える場となりました。

参加者からは「良い授業とはどういうことかについて、発見や学ぶことが多かったです」「これからの授業づくりに生かしていきたい」などの声が寄せられ、今後の本学におけるFD活動を推進するうえで、有意義な研究会となりました。

アクティブ・ラーニング研究会（第4・5回）の実施結果について

【目的】 本学学生・教職員を対象として、平成27年度授業科目ベストクラスに選定された授業の1つを公開することによって、授業改善のアイデアや手法等の情報を共有し、本学における学生・教職員相互の「授業研究」の場として、個々の教員及び大学全体の授業改善を推進することを目的とした。

【日時・内容】

●第4回アクティブ・ラーニング研究会

平成28年11月18日（金）18:30-21:40 於：神戸HLC「兵教ホール」

①公開授業（授業者：大関達也 准教授）

18:30-20:00 「教えと学びの哲学（夜間クラス）」

*大学院修士課程開講、履修者13名

②授業研究会（司会進行：宮元博章 准教授）

20:10 開会

全体討論（授業の感想等）、アクティブ・ラーニングについてグループ別に討論

21:40 閉会

※参加者数 32名（学生19名、教員9名、事務職員4名）

●第5回アクティブ・ラーニング研究会

平成28年12月8日（木）10:40-13:00 於：加東キャンパス「教育子午線ホール」

①公開授業（授業者：秋光恵子 教授）

10:40-12:10 「子ども理解と学級経営の心理学（昼間クラス）」

*大学院修士課程開講、履修者55名

②授業研究会（司会進行：伊藤博之 准教授）

12:15 開会

全体討論（授業の感想等）

13:00 閉会

※参加者数 83名（学生60名、教員18名、事務職員5名）

【周知方法】

- ・全学生、教職員あてメール通知
- ・本学Webサイト「イベント情報」に掲載
- ・学内掲示

アクティブ・ラーニング研究会（第6回）の実施結果について

【目的】

大学の授業について、「良い授業とは何か」を本学の構成員全体で考える機会とし、本学の教育の質向上に資することを目的とする。

【日時】

平成29年2月13日（月）13:10-15:10 於：総合研究棟大会議室

【内容】

テーマ「兵庫教育大学の授業をどう考えるか」

司会進行：藤木裕一 教育支援課副課長

13:10 開会

①基調報告「学生による授業評価から見た良い授業とは～自由記述の分析から」

須田康之 教授 (FD推進委員会委員長)

②パネルディスカッション (パネリスト)

・学生の立場から (大学院生)

・教員の立場から (吉水裕也 教授)

・アクティブ・ラーニングの視点から (山中一英 准教授)

15:10 閉会

※参加者数 37名 (学生14名、教員17名、事務職員6名)

【周知方法】

- ・全学生、教職員あてメール通知
- ・本学Webサイト「イベント情報」及び「本学のFD活動」に掲載
- ・学内掲示

第4回兵庫教育大学アクティブ・ラーニング研究会 アンケート（リアクションシート）集計結果

1. アンケート回答者数

学生 9名 教員 5名 事務職員 1名 合計 15名

【参考：アクティブ・ラーニング研究会への参加者数】

学 生	19名	（当該授業科目受講生12名含む）
教 員	9名	（公開授業者 1名含む）
事務職員	4名	<u>合計 32名</u>

2. 本研究会の全体の評価について

	学 生	教 員	事務職員
①大変参考になった	5人	3人	1人
②参考になった	2人	1人	0人
③あまり参考にならなかった	0人	0人	0人
④参考にならなかった	0人	0人	0人

3. 公開授業について

	学 生	教 員	事務職員
①大変参考になった	7人	3人	1人
②参考になった	1人	1人	0人
③あまり参考にならなかった	0人	0人	0人
④参考にならなかった	0人	0人	0人

上記回答理由、その他意見等（原文ママ）

- ①・色々な視点、様々な立場から解釈することの重要性
・授業の準備の大切さ
- ②難しい内容を分かり易く紹介している。人数が多いのが制約になっている。
- ③授業の進め方、資料の準備の仕方が参考になった。
- ④全員が前に出ていること
- ⑤ラスト5分しか参観できず残念でした。途中入室となり申し訳ありませんでした。
- ⑥おもしろかったです。
- ⑦参加、交流がたのしく、主体性をもてたことを現場に生かせると思った。
- ⑧新しい見方、教え方をすることができるようになりました。とても楽しくあっというまの授業でした。
- ⑨分かりやすい絵本使用して、啓蒙主義の時代に成立した近代教育の特徴と問題点について、考えることができました。

- ⑩受講生です。毎回、学ぶこと教えることの意味を考えさせられます。ルイ・アラゴンの詩にある、「学ぶことは胸に誠実をきざむこと。」をまさに実感しています。きょうの「もじゃもじゃペーター」も、深い教材だったと思います。時代背景も考慮した上で、有意義な学びができました。
- ⑪流れの作り方が大いに参考になりました。
- ⑫授業構成が大変役立ちました。
- ⑬様々な人の意見を聞くことができ、より自分自身の認識が深まった。
- ⑭一受講生として楽しく受けさせていただきました。主体的に学びながら、気づきを体系化させていくために、どんな発問や支援が有効か考えさせていただく機会となりました。

4. 授業研究会について

	学 生	教 員	事務職員
①大変参考になった	5人	3人	1人
②参考になった	1人	0人	0人
③あまり参考にならなかった	0人	0人	0人
④参考にならなかった	0人	0人	0人

上記回答理由、その他意見等 (原文ママ)

- ①思いのほか、よい議論ができたと思います。
- ②模造紙をつかって KJ 楽しいです。
- ③自分の授業をするうえで、学生の期待、意欲の方向について示唆をいただきました。どうもありがとうございました。
- ④先生はじめ受講生との意見交換によって先生の意図することがよくわかりました。
- ⑤授業について、準備や組み立て方やなど再考するきっかけがあった。
- ⑥大関先生に授業で大切にされている方針等伺えたことがとてもよい発見になりました。

5. アクティブ・ラーニング研究会に関してその他ご意見をご自由にご記入ください。

(原文ママ)

- ①ご準備される先生方に感謝申し上げます。
- ②次も楽しみです。
- ③どの人も自分なりの考えをもち、話しあえる、新しい考え方を啓発される授業でした。
- ④参加人数に関係なく、いろいろな意見を聞くことで、1人では考えつかない幅広い考え方を得ることができます。特に院では深い学びにつながると思います。
- ⑤アットホームな雰囲気で行っていただき、とてもリラックスして学びました。ありがとうございました。

第5回兵庫教育大学アクティブ・ラーニング研究会 アンケート（リアクションシート）集計結果

1. アンケート回答者数

学生 15名 教員 10名 事務職員 1名 合計 26名

【参考：アクティブ・ラーニング研究会への参加者数】

学 生	60名	(当該授業科目受講生 55名含む)	
教 員	18名	(公開授業者 1名含む)	
事務職員	5名		<u>合計 83名</u>

2. 公開授業について

	学 生	教 員	事務職員
①大変参考になった	10人	7人	0人
②参考になった	3人	1人	0人
③あまり参考にならなかった	0人	0人	0人
④参考にならなかった	0人	0人	0人

上記回答理由, その他意見等 (原文ママ)

- ①ベストクラスに選ばれた授業という先入観が来年度の受講生には入るので、良い授業のイメージが維持されやすいということですね。
- ②いつもですが、ハッとさせられる研究成果や内容で考えさせられたり、反省させられたりすることばかりです。
- ③今回はもともと受講していましたが、こんなシステムあったんだと知ることができました。
- ④いろんな資料による事例を準備してくださり現職のころに自分自身が戻り“アルアル”的にふり返り反省することができてよかったです。
- ⑤最後の伊藤先生が示された三つのベクトルでALをとらえるということと考えたときに、この授業の質的なよさがよく分かったと思います。
- ⑥2年振りに授業を受けることが出来、なつかしく感じたと同時に多くの刺激を受けることができました。
- ⑦ステレオタイプの脱し方を知れて良かった。
- ⑧「他者をみる」うえで、学校内のことだけでなく、大学の職場においても、日常生活にも大いに考えさせられる内容であった。
- ⑨授業の展開例
- ⑩講義内容が興味深く、また具体的な話も交えて伝えられるので、ずっと入ってきました。ふり返りに対するコメントに多くの時間が割かれていたのが印象的でした。
- ⑪具体的な事例やエピソードを挙げられながら、教師としての自分をふり返ることができる授業であったと思う。それに対して、秋光先生からの意味づけもなされていて、深まりのある授業であった。
- ⑫学生の長時間の集中持続。その理由が何か考えさせられた。
- ⑬講義形式で頭の中をアクティブにさせる授業をみられたのがよかったです。

3. 授業研究会について

	学 生	教 員	事務職員
①大変参考になった	7人	6人	1人
②参考になった	5人	2人	0人
③あまり参考にならなかった	0人	0人	0人
④参考にならなかった	0人	0人	0人

上記回答理由, その他意見等 (原文ママ)

- ①もっと時間をかりてたくさんの人の話をききたかったです。スケジュール的にむずかしかったと思いますが・・・
- ②授業に対して色々な人の意見を聞くことで、自分の授業感が改められてよかった。
- ③会場設定に工夫が必要か。
- ④先生方のコメントがおもしろかったです。“肉声”を交わし合うのは大切です。
- ⑤授業者の意図や、他の先生方・受講生の意見をきくことで、授業の良さをふりかえることができました。
- ⑥学生さんの授業に対する印象評価がとても役立つ。(例えば、現場でどう使うのか、置き換えられる等) と思います。院生がたずさえてくる想いや実践経験をどうふまえるのかを、教員が考えていくことは極めて重要だと感じています。
- ⑦時間配分等
- ⑧受講生、参観した教員からの意味が聞けてよかった。
- ⑨参観している自分の目を疑う必要を直前の授業で「教えられ」ていたこともあり、受講生や授業者、フロアの方々のコメントで確信を得られた思いがある。
- ⑩見えない協同性。逆に見える協同性があると学力差が吸収できる。ついて来れてないと思われる学生がいたらどう対応すべきか。

4. 本研究会の全体の評価について

	学 生	教 員	事務職員
①大変参考になった	12人	7人	1人
②参考になった	2人	3人	0人
③あまり参考にならなかった	0人	0人	0人
④参考にならなかった	0人	0人	0人

5. アクティブ・ラーニング研究会に関してその他ご意見をご自由にご記入ください。

(原文ママ)

- ①もう少し時間があっても・・・
- ②アクティブ・ラーニングの理想的な実践例というものが知りたいと思いました。
- ③主体的な学びする機会となりました。
- ④授業の良さを考えることは、自分が今後授業をすることにも役立つと思いました。
- ⑤大学の授業の質を上げることと、アクティブ・ラーニングは完全には重ならないように思う。幅広くFDを考えてよいのではないか。
- ⑥学生が参加しての授業研究は、学習者の実態をふまえた授業立案を行っていく上でもっと重視すべきだと思います。
- ⑦図の文字がよく見えないのが残念
- ⑧もっと多くの参加者に来てほしいですネ！

第6回兵庫教育大学アクティブ・ラーニング研究会 アンケート（リアクションシート）集計結果

1. アンケート回答者数

学生 10名 教員 13名 事務職員 3名 その他 1名 合計 27名

【参考：アクティブ・ラーニング研究会への参加者数】			
学 生	14名		
教 員	17名		
事務職員	6名		
			<u>合計 37名</u>

2. 本研究会の全体の評価について

	学 生	教 員	事務職員	その他
①大変参考になった	6人	7人	0人	1人
②参考になった	4人	6人	3人	0人
③あまり参考にならなかった	0人	0人	0人	0人
④参考にならなかった	0人	0人	0人	0人

上記回答理由，その他意見等 （原文ママ）

- ①良い授業を作るためのポイントを分かりやすく教えて頂きありがとうございました。
今春から、教壇に立つので、授業作りに不安を抱いていたのですが、今日の先生方のお話を聞くことで少し解消されました。“教員は分かっているのか、分かったつもりでないか”この問いを常に抱き、授業、学級経営をしていきたいと思いました。
- ②良い授業とはどういうことかについて、様々な意見を聞かせていただくことが出来、自分の考えについても再考することが出来、発見や学ぶことが多かったです。
- ③アクティブ・ラーニングについて、評価や内容などを理解することができました。
やはり、子供たちの学習への意欲を引き出すことが大事なので、子供たちをいかに勉強に積極的に参加させるということをもっとけんとうすることが必要だと思いません。
- ④「質のよい授業とは何か」について興味がわきました。
↓（対等的に見ることできるのか）
問いの質がよい
「問いと教材があれば授業が成り立つ」ことについては疑問を持っています。
- ⑤「よい授業をどう作るのか」というような問いはシンプルであるがとても重要であると思われます。もちろん、このような問いを解決することは決して容易ではないですが、2年間の大量の自由記述を分析したことが、FD推進委員会のスバラシ点であると思います。このようなやり方が先生に対する評価する（点数で決めること）

- ことより、はるかに意義があると思います。
- ⑥自分の考えをふり返る機会になりました。
 - ⑦山中先生の構成主義に立った「学び」の捉え方に多くの支唆を得ました。
ただ、山中先生もおっしゃられたように、「アクティブ・ティーチング」と「アクティブ・ラーニング」が混在している気がします。
 - ⑧よい授業とは何なのかを大学のアンケートから考えていき、自分にとってのよい授業とは何かを考える機会となった。
 - ⑨三名のパネラーの方の発言の中には、さらに聞きたいと考えることがありました。
パネラーの方に質問・意見できる時間がもうすこしあればよかったですね。
 - ⑩アクティブ・ラーニングの定義が難しい。相互作用から主体的学びをひきだし、アクティブ・ラーニングにつながると分かりました。が、私は、アクティブ・ラーニングを狙って授業をすることは不可能であると考えています。アクティブ・ラーニングとは何なのか、を学習していきたいです。
 - ⑪解説的・スキル習得の授業が殆ど。探究的な授業には不向きな専門。
赴任したときにあれば良かった。
 - ⑫多面的に刺激されました。たとえば、良質な問い→active な情報処理→良質な知識・概念を有した学生→active な情報処理
 - ⑬1. 須田先生が説明された資料（「自由記述」の分析結果）の内容をもっと掘り下げて議論を深めて研究会を進めていただきかった。
2. 初等・中等教育諸学校と大学との比較で、「良い授業」を議論する場が欲しかった。
3. 教員養成という立場より、「良い授業」とは現場に還元できる内容であるという内容が必須と思うが、そういう視点には言及がなかった。
 - ⑭省察の機会になったから。基調報告の中の自由記述紹介例が小～中規模人数科目だったので、81人以上のものも知りたかった。
 - ⑮三人のパネラーの発言が参考になりました。
 - ⑯アクティブ・ラーニングであるかは、学習者の内面次第という考え方が参考になった。
 - ⑰知識の意味を再度自分に問いかけ、学生に開示していくべきだと思った。これからの授業づくりに生かしていきたい。「問い」とは、教育活動の基礎であり、コミュニケーションの基礎でもあることを再認識した。
 - ⑱FD委員長として自由記述の分析結果から、知識が生まれる時代背景や社会的背景の説明を語ることで、知識を再度捉え直すことになること。
パネルディスカッションでは課題をあきらかになった。
 - ⑲自分の授業をふり返り、改善のための知識と意欲をいただいた。「良い授業」を考える機会になりました。
 - ⑳改めてよい授業とは何かを様々な視点から考えることができました。
 - ㉑アクティブ・ラーニングとは何か学べました。
 - ㉒「そもそも教員は分かっているのか？」とても新鮮な問いかけだった。

- ⑳パネルディスカッションの進行方法で、フロアも参加させる（アクティブにさせる）ものであり、参加者にも効果的な研究会であった。
- ㉑全学での課題であると共に多くの教員と共有したい時、テーマだと思いました。

3. アクティブ・ラーニング研究会に関してその他ご意見をご自由にご記入ください。

(原文ママ)

- ①アクティブ・ラーニングとは何か？最近、友人との間で話題になりました。アクティブ・ラーニングの本来の意味が、異変していて、今日の先生方のお話でさらに知を深められた気がします。これからの授業作りに活かしていきたいです。
- ②授業を考えた時に、知識を教え込まれるような場だけではいけない。しかし、知らないこと、分からないことについて考えることは難しい。そこで、分かっていると思いついていて、多様な考えに触れ、再発見、再構築していく過程も大切だと学びました。参加させていただくことが出来て良かったです。貴重な会をありがとうございました。
- ③良い授業のとり組みは実に意味深い問題で、これからアクティブ・ラーニングについて、もっと理解したいと思っています。
- ④もっと討論ができればいいなと感じました。
- ⑤よい問いと悪い問いに関する考え：
問いを立てるのが知識を伝えるという目的があるので、その目的に応じて、問いもそれぞれであるので、そのよし、あしを決めるのが難しいです。どんな問いであっても、それを生徒にかけることであるので、問いをかける方法の部分が大事であると思います。つまり、問いをかけるまで導入のステップが大切であると考えられます。
- ⑥大学における内的・・・は、受ける側の問題意識、参加意識によるところも大きいと思う。(発言しなくても、内的にアクティブになれるか)ただし、その場をファシリテイトする先生の問い、または、講義の目的、本時の目的がはっきり提示して、共通理解（先生と学生）できているかによるのでは。時々、なぜ、この問いで議論するのかと思う時もある。そのズレがあると、たとえ議論が活発であっても、深みのないものになるのではないかと。
- ⑦学習者に能動的な学習を引き起こす要因は何なのかなど、アクティブ・ラーニングについて考える機会となりました。ありがとうございました。
- ⑧この会自体をさらにアクティブにするためには、ワールドカフェをとり入れるなど、方法的な工夫が必要だと思います。よりフランクに互いに話し合える場をつくるのが大切ではないでしょうか。
- ⑨テーマが大きいように感じました。様々な視点でディスカッションできるのは良い取り組みだと思いますが、もう少しテーマを絞って、深い話ができればいいと思います。山中先生、吉水先生がいらっしゃるのでもっと意見を聞きたいです。
- ⑩アクティブ・ラーニング研究会自体がアクティブ・ラーニング的になっていないのは何かしっくりこないです。シンポジウム形式自体が悪いという訳ではないですが、

シンポジストの発言の比較がしやすいように板書／公開記録をしつつ、それを元にした話ができるような工夫も考えていくべきではないでしょうか。(研究会のAL化の工夫)

「よい授業は」という問いは「授業をはかるための規準をどこに設定するか?」という問いにおきかえて考えてみるべきかもしれないと考えました。

ALを追究すると、当然学生の頭脳活動の強度×時間(リソース)を大幅に増大させることになる。学生のもつリソースは有限であり、その枠を考慮に入れないといけなくなると思われます。その意味で、現在の本学のカリキュラムは「こなすのに精一杯」なのに、それ以上を求めると多くの学生は破綻するのではないかと思います。カリキュラム自体の大幅な見直しが必要ではないでしょうか。

- ⑪とらえ方の違いがわかり、今後の学校にいかせたい。授業の質は、問いの質ということが少しわかりました。
- ⑫「アクティブ・ラーニング」の冠をとることで、見えなくなることがあるのではないか?
- ⑬知的に平均以上の者が集まっている場におけるFDと、平均以下の者や障害のある者も含まれる集団を指導する小学校の教員にとってのアクティブ・ラーニングは、異なる点があることを意識すべきと思う。
- ⑭<パネルディスカッションがアクティブ・ラーニングになっている。>須田先生おつかれ様でした。
- ⑮開催時期が参加者数に関係しているかもしれません。もっと多くの教員に参加してほしいと思います。今後も、こういう機会を増やしていただければ幸いです。
- ⑯今後、もっと盛会になることを望みます。

4. 平成28年度「学生による授業評価」実施結果

【平成28年度 前期】

1. 実施時期

7月1日～前期科目終了まで

(7月1日以前に授業が終了する場合は、終了の1週間前に調査票を配付し、随時実施)

2. 実施方法

(1) 授業評価調査票によるアンケート調査とする。

(2) 調査票の配付及び回収方法は、次のとおり。

- ・ 授業終了までに、授業担当教員が授業評価調査票を受講生に配付する。
- ・ 調査票の回収は、受講生の代表者が行い、回収用封筒に入れて、その場で封をして教員に渡す。
- ・ 教員が教育支援課教務企画チームへ封筒を提出する。

(3) 次の点を学生に周知し、実施する。

- ・ この調査は学生の授業への取組や理解度を把握し、授業の改善を行うために実施するものであること。
- ・ 成績に影響することは全くないので、授業を受けて感じたことをそのまま回答して欲しいこと。
- ・ 複数の教員が分担をしている授業は、授業科目全体としての評価をすること。教員ごとの評価をしたい場合は、自由記述欄に記入すること。
- ・ 項目⑧「安全への配慮・指導がなされていた。」の回答の有無については教員の指示に従うこと。

3. 調査結果の活用

集計結果については、教員にフィードバックし、授業の内容・方法等の改善に活かすとともに、必要に応じて教員のコメント等を付記し、個々の授業科目ごとに公表（学内限定）する。

4. 実施結果（最終集計結果）

対象科目数（A）	403
実施科目数	391
未実施科目数（B）	12
未実施科目割合（(B) ÷ (A)）	2.97%

※未実施理由

- ・ 実施の失念していた。または、返却なし。 (10科目)
- ・ 履修者が授業に出席しなかった。 (2科目)
- ・ アンケート調査を配付する前に終了していた。 (0科目)

【平成28年度 後期】

1. 実施時期

1月10日～後期科目終了まで

(1月10日以前に授業が終了する場合は、終了の1週間前に調査票を配付し、随時実施)

2. 実施方法

(1) 授業評価調査票によるアンケート調査とする。

(2) 調査票の配付及び回収方法は、次のとおり。

- ・ 授業終了までに、授業担当教員が授業評価調査票を受講生に配付する。
- ・ 調査票の回収は、受講生の代表者が行い、回収用封筒に入れて、その場で封をして教員に渡す。
- ・ 教員が教育支援課教務企画チームへ封筒を提出する。

(3) 次の点を学生に周知し、実施する。

- ・ この調査は学生の授業への取組や理解度を把握し、授業の改善を行うために実施するものであること。
- ・ 成績に影響することは全くないので、授業を受けて感じたことをそのまま回答して欲しいこと。
- ・ 複数の教員が分担をしている授業は、授業科目全体としての評価をすること。教員ごとの評価をしたい場合は、自由記述欄に記入すること。
- ・ 項目⑧「安全への配慮・指導がなされていた。」の回答の有無については教員の指示に従うこと。

3. 調査結果の活用

集計結果については、教員にフィードバックし、授業の内容・方法等の改善に活かすとともに、必要に応じて教員のコメント等を付記し、個々の授業科目ごとに公表（学内限定）する。

4. 実施結果（最終集計結果）

対象科目数（A）	388
実施科目数	368
未実施科目数（B）	20
未実施科目割合（(B) ÷ (A)）	5.15%

※未実施理由

- ・ 実施を失念していた。または、返却なし。（16科目）
- ・ アンケート調査を配付する前に終了していた。（3科目）
- ・ 最終日に学生が欠席した。（1科目）

5. H28年度 他大学等のFD研究会等参加状況一覧

No.	所属	役職	氏名	用務内容	日程	用務先
1	人間発達教育専攻 教育コミュニケーションコース	教授	須田 康之	関西地区FD連絡協議会第9回総会	2016/5/28(土)	関西地区FD連絡協議会 (大阪大学)
2	教育実践高度化専攻 生徒指導実践開発コース	准教授	山中 一英	関西地区FD連絡協議会第9回総会	2016/5/28(土)	関西地区FD連絡協議会 (大阪大学)
3	教育支援課	副課長	藤木 裕一	関西地区FD連絡協議会第9回総会	2016/5/28(土)	関西地区FD連絡協議会 (大阪大学)
4	教育支援課 教務企画チーム	主査	中野 友子	関西地区FD連絡協議会第9回総会	2016/5/28(土)	関西地区FD連絡協議会 (大阪大学)
5	教育支援課 教務企画チーム	課員	小平 健太郎	関西地区FD連絡協議会第9回総会	2016/5/28(土)	関西地区FD連絡協議会 (大阪大学)
6	教育実践高度化専攻 学校経営コース	准教授	當山 清実	平成28年度 ICT利用による教育改善研究発表会「教育の質的転換を目指すICT利用」	2016/8/9(火)	東京理科大学
7	教育実践高度化専攻 生徒指導実践開発コース	准教授	淀澤 勝治	創価大学教職大学院・教育学部主催 「教職大学院・教育学部フォーラム」	2016/9/10(土)	創価大学
8	IR・総合戦略企画室	特命助教	坂口 真康	筑波大学グローバル教師力開発推進室主催「新学習指導要領の実施に向け教職教育はどう変化するべきか」	2017/2/22(水)	筑波大学

6. 平成 28 年度 教職大学院授業改善・FD 委員会 活動実績

教職大学院授業改善・FD 委員会

活動領域	No	活動項目	種類	活動内容	達成基準	困難度 予想	達成度達成状況と評価
1 研修会 等による FD	1	他大学FD活動の情報収集	継続	・他大学のFD協議会やFDシンポジウムから情報収集。	年間2回以上	B	東京理科大学、創価大学のFD会合に参加。達成し評価【B】
	2	教員向けFDセミナーの開催	充実	・専任教員会議でのFD活動取組状況研修 ・eポートフォリオ活用研修会実施。 ・全学FD委員会の活動と連携。(ベストクラス等への参画)	年間5回以上。 各種活動への参加者のべ150人以上。	B	FD研修会を3回実施し、192人が参加した。全学活動も連携し、達成度「ほぼ達成」の評価【B】
	3	eポートフォリオの活用促進	充実	・eポートフォリオの活用した学生との双方向のやり取りの実現。	新入学生に対する研修会実施。	C	各コースでれに年以上に運用中。達成度「上回る」、評価【B】
2 授業評価 によるFD	4	授業評価結果と改善案の学生報告	充実	・授業評価結果と、改善方を学生に提示。	学生・教員参加40名以上。	B	学生だけで106名参加。達成度「上回る」、評価【A】
	5	「共通基礎科目」と「専門科目」の授業評価実施(前期・後期)	継続	・評価ソフトを活用して、「教育課程」「共通基礎科目」「専門科目」「課題研究」について、教員自己評価と学生からの授業評価を実施。	外部評価委員会・教員会議で評価結果報告。担当教員に結果開示。学生回収率90%以上。	B	「教育課程」「共通基礎科目」「専門科目」「課題研究」は、教員自己評価と学生からの授業評価実施。「実習科目」は実習校からの評価も実施。学生回収率95%超え。達成度「上回る」、評価【A】
	6	「実習科目」「課題研究」の授業評価実施(後期)	継続	・評価ソフトを活用して、「実習科目」について、教員自己評価と学生の授業評価、実習校評価の多面評価実施。	学生回収率90%以上。	B	学生回収率95%超え。達成度「上回る」、評価【A】
	7	授業評価システムの改善	新規	・授業評価の自由回答等を学部や修士に合わせる改善を検討。	年度末までに改善完了。	A	完了しHPで公表。達成度「ほぼ達成」、評価【A】
	8	授業評価システムの外注化	新規	・授業評価システムの外注化を検討し、29年度から移行させる。		A	外注化はしないが、簡素化への改善は実施に向けて準備中。達成度「ほぼ達成」、評価【A】
	9	修了生に対する教育成果調査の実施	充実	・修了生に対する教育成果調査システムの改訂版を開発・実施。	改訂版による調査を実施。	B	達成度「ほぼ達成」、評価【A】
	10	実習・課題研究の改善	充実	・実習や課題研究の改善を実施。	学生や実習校の評価結果向上。	B	(後期調査の結果待ち)
3 外の風 による FD	11	教育実践高度化専攻の授業公開	継続	・公開授業やゼミ公開等実施。(年間2回) ・実習校との意見交換実施。	5月、10月:公開授業。 3月:連携協力校会合。	B	計画通りに実施した。達成度「ほぼ達成」の評価【B】
	12	各種媒体で、教職大学院情報の露出	継続	・新聞や専門誌、また学会等のパネルで、教職大学院情報を積極的に発信。	3回以上。	A	教職大学院研究会をはじめ、学会や紀要で発信3回。評価【A】
	13	授業公開の推進	継続	・学外者の授業参観・視察の促進。	外部の授業参観10科目以上。	A	9科目に参観・視察あり。ほぼ達成で、評価【A】

(註1) 困難度 A: かなり困難で格別の努力が必要、B: 困難でかなりの努力が必要、C: 努力が必要

(註2) 上記表中の網掛け部分は、教育課程・授業評価に直接関連する項目。*は現段階では不明のもの。

(註3) 達成度は下記のマトリクスで評価する。

		達成基準を満たした程度		
		上回る	ほぼ達成	下回る
困難度	A格別の努力	S	A	B
	Bかなりの努力	A	B	C
	C努力	B	C	D

III 資料

本学におけるFDの定義について

兵庫教育大学におけるFDとは、本学のミッション及びビジョンを実現するために、大学院・学部におけるカリキュラムや授業についての内容・方法・評価等に関して、教員と事務職員が協働し、学生の参画を得て行う、教育の質保証をめざすあらゆる取組のことである。

【定義のポイント】

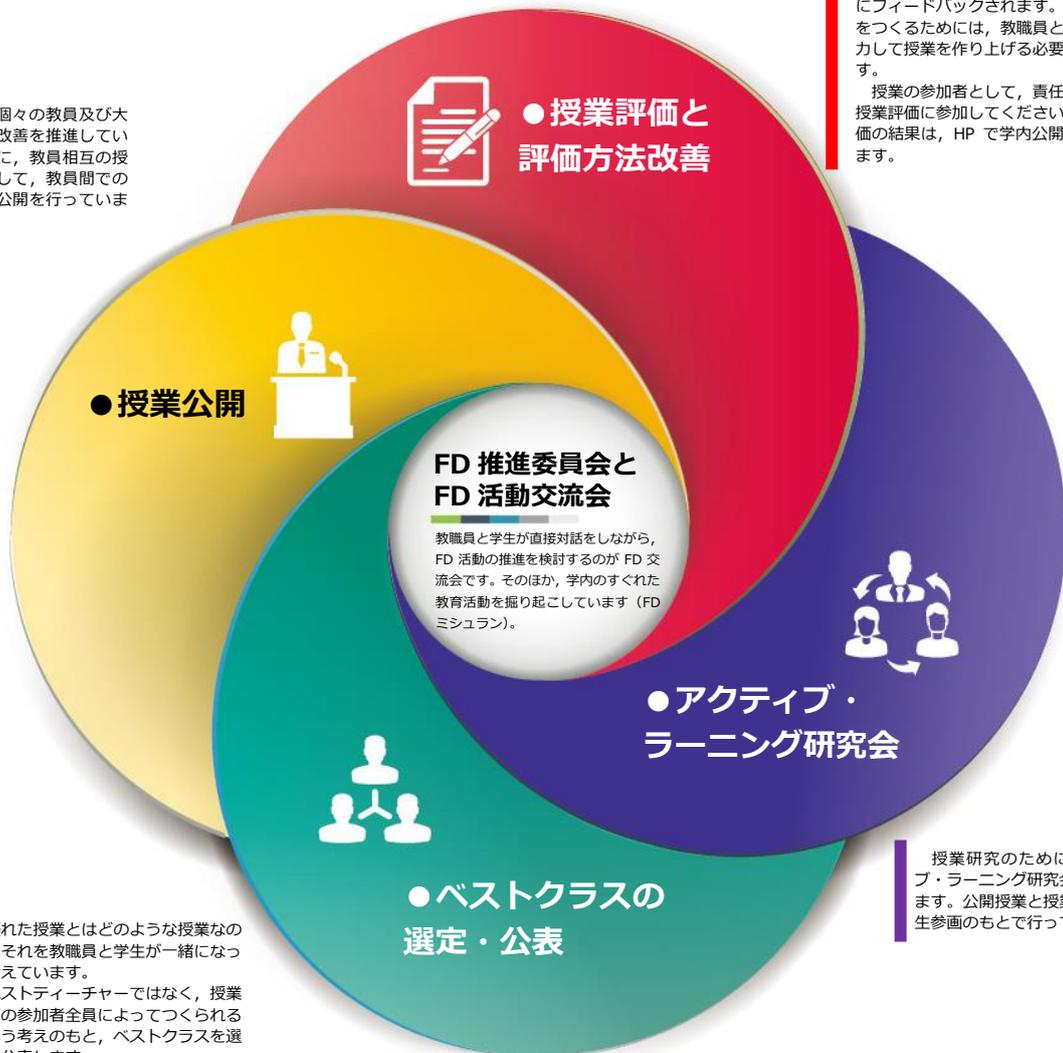
- (1) 本学のミッション及びビジョンを実現すること (What for)
- (2) 全学で日常的に行われる全ての教育改善活動や学修支援活動をFD活動と認識すること (What)
- (3) 教員と事務職員が協働し、学生の参画を推進すること (Who)
- (4) 教育の質保証及び教育力向上をめざすあらゆる取組の妥当性、有効性について継続的に検証を行い、更なる改善・充実を組織的に図ること (How)

兵庫教育大学における FD 推進活動への取り組み

FD とは、ファカルティ・ディベロップメントの略で、教育の質保証をめざす取り組みのことです。

本学における FD とは、本学のミッション及びビジョンを実現するために、大学院・学部におけるカリキュラムや授業についての内容・方法・評価等に関して、教員と事務職員が協働し、学生の参画を得て行う、教育の質保証をめざすあらゆる取り組みを指しています。

本学では、個々の教員及び大学全体の授業改善を推進していくことを目的に、教員相互の授業研究の場として、教員間での日常的な授業公開を行っています。



前期末および後期末に全ての授業で授業評価を行っています。評価結果は10~11月(前期)と4~5月(後期)にフィードバックされます。よい授業をつくるためには、教職員と学生が協力して授業を作り上げる必要があります。

授業の参加者として、責任を持って授業評価に参加してください。授業評価の結果は、HP で学内公開されています。

優れた授業とはどのような授業なのか。それを教職員と学生が一緒になって考えています。

ベストティーチャーではなく、授業はその参加者全員によってつくられるという考えのもと、ベストクラスを選定し公表します。

授業研究のために、アクティブ・ラーニング研究会を行っています。公開授業と授業研究会を学生参画のもとで行っています。

国立大学法人兵庫教育大学ファカルティ・ディベロップメント推進委員会規程

(平成16年4月1日規程第17号)

改正

平成17年3月31日
平成17年9月6日
平成18年3月8日
平成18年7月12日
平成18年12月6日
平成19年3月14日
平成20年1月16日
平成20年3月11日
平成23年3月14日
平成24年3月26日
平成25年4月2日
平成28年1月13日
平成29年3月14日

(設置)

第1条 国立大学法人兵庫教育大学（以下「本学」という。）におけるファカルティ・ディベロップメント（教育の内容及び方法の改善を図るための組織的な研修及び研究。以下「FD」という。）の推進を図るため、国立大学法人兵庫教育大学ファカルティ・ディベロップメント推進委員会（以下「委員会」という。）を置く。

(構成)

第2条 委員会は、次の各号に掲げる者をもって組織する。

- (1) 副学長のうち学長が指名した者 1人
- (2) 教育支援担当の学長特別補佐
- (3) 次のア、イ及びウの区分により各専攻からの推薦に基づき学長が指名した者
 - ア 人間発達教育専攻又は特別支援教育専攻に所属する教授、准教授、講師又は助教 2人
 - イ 教科教育実践開発専攻に所属する教授、准教授、講師又は助教 3人
 - ウ 教育実践高度化専攻に所属する教授、准教授、講師又は助教 1人

(4) 学長が指名した者

2 前項第3号及び第4号に規定する委員の任期は、2年とする。ただし、欠員を生じた場合の後任の委員の任期は、前任者の任期の残余の期間とする。

3 前項の規定による委員は、再任されることができる。

(委員長及び副委員長)

第3条 委員会に委員長及び副委員長を置き、委員長は、前条第1項第2号に規定する学長特別補佐をもって充て、副委員長は、委員の互選によって定める。

2 委員長は、委員会を招集し、議長となる。

3 副委員長は、委員長を補佐し、委員長に事故があるときは、委員長の職務を代行する。

(所掌事項)

第4条 委員会は、次の各号に掲げる事項を企画し、及び実施する。

- (1) FDに係る調査・研究に関すること。
- (2) 教育の内容及び方法を改善するための支援に関すること。
- (3) 教育改善に係る評価に関すること。
- (4) その他FDに関すること。

(議事)

第5条 委員会は、委員の3分の2以上の出席がなければ議事を開き、議決することができない。

2 委員会の議事は、出席委員の過半数でこれを決し、可否同数のときは、議長の決するところによる。

(代理出席)

第5条の2 委員会は、第2条第1項第3号に規定する委員が事故その他やむを得ない理由により

委員会に出席できないときは、当該委員が所属する専攻の教授、准教授、講師又は助教を代理者として出席させることができる。

2 前項の規定により代理者を出席させた場合は、当該代理者を委員とみなす。

(委員以外の者の出席)

第6条 委員会は、必要があると認めるときは、委員以外の者の出席を求め、意見を聴くことができる。

(専門委員会等)

第7条 委員会が必要と認めるときは、専門的な事項を調査検討するため、専門委員会等を置くことができる。

(事務)

第8条 委員会に関する事務は、教育研究支援部教育支援課が処理する。

(雑則)

第9条 この規程に定めるもののほか、委員会の運営に関し必要な事項は、別に定める。

附 則

この規程は、平成16年4月1日から施行する。

附 則

この規程は、平成17年4月1日から施行する。

附 則

この規程は、平成17年9月6日から施行する。

附 則

この規程は、平成18年4月1日から施行する。

附 則

この規程は、平成18年7月12日から施行する。

附 則

この規程は、平成19年4月1日から施行する。

附 則

1 この規程は、平成19年4月1日から施行する。

2 この規程施行後第2条第1項第2号の規定に基づき最初に指名された委員の任期は、同条第2項の規定にかかわらず、学長が定める。

附 則

この規程は、平成20年4月1日から施行する。

附 則

この規程は、平成20年4月1日から施行する。

附 則

1 この規程は、平成23年4月1日から施行する。

2 この規程施行後第2条第1項第3号及び第4号の規定に基づき最初に指名された委員の任期は、同条第2項の規定にかかわらず平成24年3月31日までとする。

附 則

この規程は、平成24年4月1日から施行する。

附 則

この規程は、平成25年4月2日から施行し、平成25年4月1日から適用する。

附 則

1 この規程は、平成28年4月1日から施行する。

2 この規程施行後第2条第1項第3号及び第4号の規定に基づき最初に指名された委員の任期は、同条第2項の規定にかかわらず、学長が定める。

附 則

この規程は、平成29年4月1日から施行する。

平成 21 年 11 月 6 日
学 長 裁 定
改正 平成 26 年 6 月 2 日

授業公開の実施に関する申合せ

1 授業公開の目的

本学における教員相互の「授業研究」の場として設定し、個々の教員及び大学全体の授業改善を推進していくことを目的とする。

2 対象授業

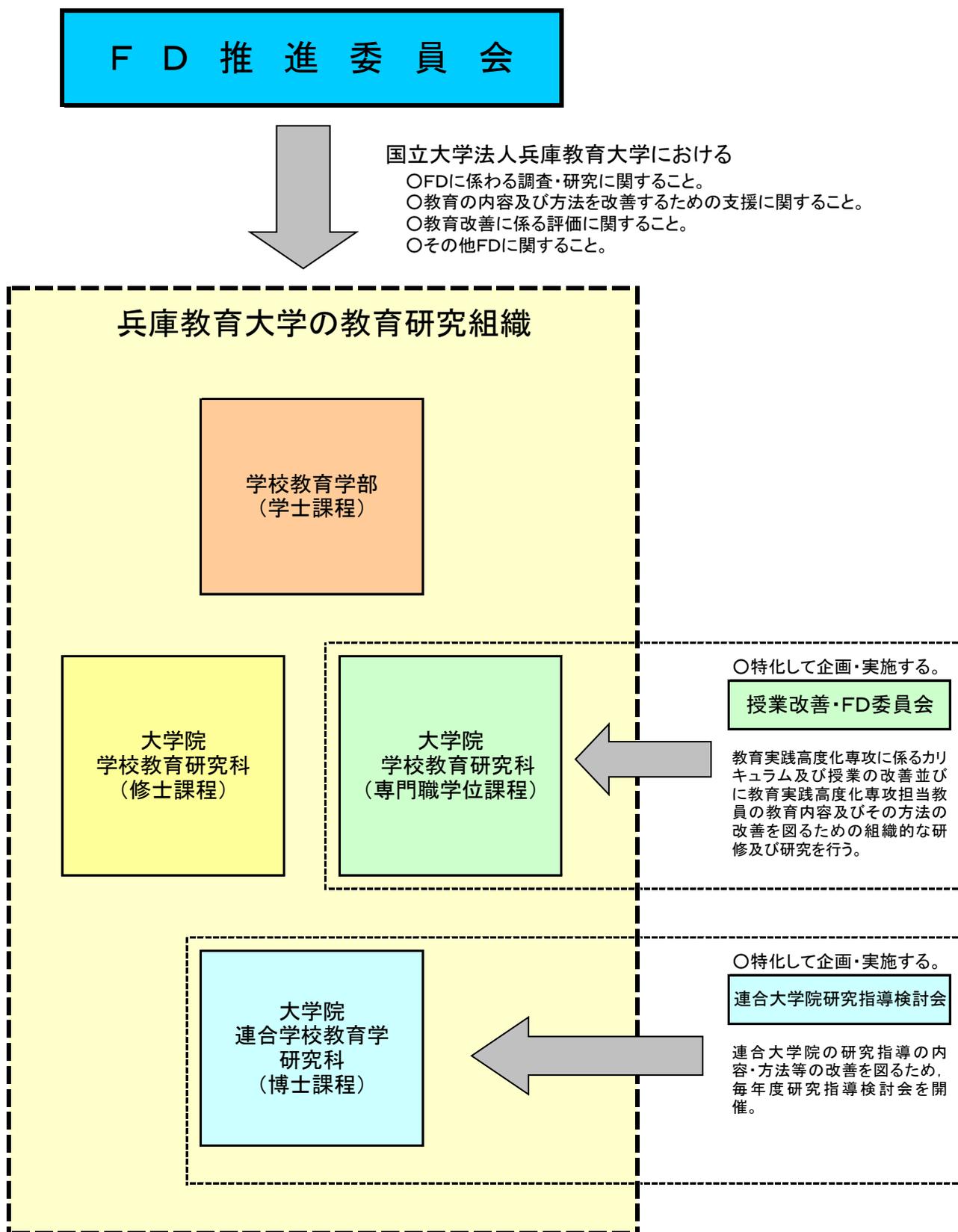
原則として、授業は全面公開とする。ただし、授業担当教員が公開することが適切でないと判断した授業については除外する。

3 公開期間

各教員においては、日常的に「授業研究」を行い、授業の改善に努めているところであるが、このような大学組織としての「授業研究」をさらに推進するため、個々の授業科目において授業公開を行うことができるものとする。その場合、授業公開に参加を希望する教職員は、当該授業担当教員に対し事前に了承を得るものとする。ただし、日常の教育活動を保証するため、次の期間については公開の対象としない。

- (1) 定期試験の期間
- (2) 学期当初の期間（1～2週間）
- (3) 実地教育等に関わる期間

本学におけるFD推進委員会と教育研究組織との関連図



ファカルティ・ディベロップメント推進委員会委員名簿

平成28年4月1日現在

所属等	職名	氏名	任期	備考
—	副学長	名須川 知子	—	第1号委員
—	学長特別補佐 (教育支援 (FD) 担当)	須田 康之	—	委員長 第2号委員
人間発達教育専攻 教育コミュニケーション コース	准教授	宮元 博章	H28.4.1 ~H29.3.31	第3号委員
特別支援教育専攻 発達障害支援実践コース	教授	樋口 一宗	H28.4.1 ~H30.3.31	〃
教科教育実践開発専攻 言語系教育コース	教授	菅井 三実	H28.4.1 ~H30.3.31	〃
教科教育実践開発専攻 理数系教育コース	准教授	小川 聖雄	H28.4.1 ~H30.3.31	〃
教科教育実践開発専攻 生活・健康・情報系教育 コース	教授	長瀬 久明	H28.4.1 ~H29.3.31	〃
教育実践高度化専攻 授業実践開発コース	准教授	伊藤 博之	H28.4.1 ~H29.3.31	〃
教育実践高度化専攻 生徒指導実践開発コース	准教授	山中 一英	H28.4.1 ~H30.3.31	第4号委員